

大正十年十二月の黒點觀測

古川 龍 城

十二月十六日午後零時五十分。同月十三日小黒點の一群が太陽面上に出現したのを發見したから此の日も其れを四時の望遠鏡で觀望したら十三個ばかりの小黒點の本影が大凡一つの半影に包括されて居るのが解つた。其の際山本助教が東の椽邊に二個稍大なる黒點を發見されたから、試に其れが見えずなる迄追跡したのが、此の記録となつたのである。挿圖の數字は皆日附を示す。本日の分の縦に長いのは椽にあるからで、本當は圖の様に細長くはないのである。(第四十二頁上圖を見よ)

十九日午前十時三十分。前日見た一群の小黒點は西方に移動し、少くとも十六個の本影部を數へた。又中央に六個ばかりの一群も見え出したが、今は其等に就いての記録は止め、昨日の二大黒點の消息を言ふならば、其れは丁度葵^{あひ}の葉の様な半影部に包まれて本影は三個に分裂した。そして其の上(圖は上下左右轉倒して居る)に四個ばかりの小さい景物が

添へられてあつた。半影部の直径は少くとも地球の其れの三倍以上はあるだらう。

二十日午後零時十五分。少し横に長くなつたのは、原形の變化でなく、中心に近づいた爲めであらう。

二十一日午前十一時。天氣が悪く十分見えなかつたが三個の本影が左右對稱に列んで居る。

二十二日午前中。圖の様に黒い部分が一方は二個、他方は一個、半影部に蔽はれた。

二十三日午前十一時

二十四日午前十一時

二十六日午後三時十五分。以上三回の觀測中漸次西方に動き、稍細長く見える様になつた。

二十七日午後零時二十分。西端に將に隠れむとする計り、甚だ細くなつて終つた。翌日はもう見えなかつた。

編者曰く。

目下、太陽は活動最小の時期であるにかゝはらず、去る十二月中旬以來、多大の黒點や白斑が太陽面上に現はれた。(毎日の觀測統計報告はブレテン第五號にある。)京都では古川氏等、諏訪では三澤氏等が之れを觀測せられたが、その中で、特に面積の大きな黒點について、両氏が別々に綿密な觀察を試みられた結果を、こゝに讀むことが出来るのは興味深いことである。第二二頁には両氏のスケッチが並べられてある。それを両々相くらべて見ると、器械の違いや、人の違ひにもかゝはらず、殆んど好く一致してゐる。そして、天氣都合のため、一方で觀測の出来なかつた時、他方の觀測が之れを補つてゐる有様が誠に面白い。吾人の持論である通り、天體觀測といふものは、協同的にやらなければならないといふことが、こゝに最も明白に示されてゐるのは意味が深い。